

杉並郷土史会 第345回例会 平成14年3月17日

「杉並の作家と『文学館』」 講師 杉並区立郷土博物館 寺田 史朗

私は杉並区立郷土博物館に勤めておりまして、今回「杉並の作家と『文学館』」という題で、お話をさせていただきます。最初に、私の自己紹介を少しいたします。

私は杉並生まれではないのですが、小さいときから杉並に居りまして、オリンピック前の杉並の原風景も多少は知っているつもりです。

中学生ぐらいから杉並区内の発掘などに顔を出しておりまして、高校までは考古学少年と言いますか、そういうことをしておりました。高校では民俗学に興味を持ちまして少しかじってみました。その後は歴史学で、古代史ですとか宗教学などもかじったものですから、どちらかというところ専門がございません。

今回、特に「文学館」ということで文学の話をお話させていただきますが、これも私の専門ではないので、それほど突っ込んだお話が出来るかどうか、おぼつかないところです。けれども、杉並文学館の担当をしておりますので、そこで知り得た情報をお話しさせていただきます。

私は平成9年から博物館に勤務しておりますが、その前は十数年、文化財係におりました。その関係で郷土史会の役員の方とは、面識がございました。郷土史会の会員の方との関係では、文化財係で文化財シリーズを出しています。その文化財シリーズの中で杉並の石仏や、「通称地名」といった調査を郷土史会にお願い致しまして、皆さんに調査して頂いたこともあります。そのときに多少、顔を会わせた方もいらっしゃるのではないかと思います。こういった郷土史会との関係や、博物館で一昨年に妙法寺の文化財展を行い、そのときも展示内容の説明をさせていただきました。ですから、顔を見て「あ、そう言えば...」と、思い出して頂ける方もあるかと思います。

それでは、本題に入ります。

今日は、「杉並の作家と『文学館』」ということで、お話をさせていただきますが、まず博物館の宣伝をさせていただきます。

博物館は平成元年に開館致しました。常設展示室で展示しておりますように、基本的には杉並の歴史が分かるような形の博物館活動をする、どちらかというところ歴史系の博物館でございます。ですから、もともと文学館を想定しておりませんので、これまではあまり文学について言及してきませんでした。ところが、バブルの時期に博物館があちらこちらに出来まして、その時期に入場者がどんどん右肩上がりに増えていったのですが、その後は全国的に博物館、美術館の入場者数が減ってきております。そして、この経済状況の中であちらこちらの美術館、特にデパートなどで経営されている美術館などが閉鎖されているという状況があります。

実は、東大駒場にあります東京都の近代文学博物館が今年度で廃止になり、奇しくも今日が最終日なのです。ですから私としては、ここで話を聞いて頂

くよりも「そちらのほうを、じっくり…」という気がしないでもありません。このような状況で、我々の博物館・美術館の置かれている状況が非常に変わりつつあり、開館して10年という杉並区の郷土博物館も、少しこれまでとは違った形のものを考えていかなければならなくなりました。

来て頂いた方はご存知だと思いますけれども、うちの博物館は1,000平米ちょっとの非常に小さな博物館です。その中には常設展示室と特別展示室の2室がございます。特別展示室は年1回行う特別展、あるいは年2、3回行う企画展のときだけオープンして、皆さんに見て頂くという状況でした。そこで、狭い中で施設を有効に活用しなければいけないのではないかと、ということで特別展示室を常に開けて行く何かいい方法はないだろうかと考えたのが、この「文学館」です。

開館の頃ちょうど井伏鱒二さんが『荻窪風土記』をお書きになっていました。その『荻窪風土記』の中で、関東大震災の頃から昭和50年代くらいまでの荻窪の遷り変わりに触れていらっしゃいました。そこで、私どもでは常設展示室の近現代部分のところで、それを下敷きにして、近現代の展示をしようということになりました。オープンしたとき井伏鱒二さんはまだご存命でしたので、いろいろご協力を頂いて資料も寄贈頂くなど、博物館と井伏鱒二さんとの関係が出来上がったわけです。

その後、井伏鱒二さんは残念ながら平成5年にお亡くなりになります。平成6年には、「追悼展」ということで展示会をさせて頂きました。その後、平成10年が井伏鱒二さんの生誕100年にあたりましたので「生誕100周年記念展」を行いました。館がオープンしたときも、「阿佐ヶ谷界隈の文士展 井伏鱒二とすばらしき仲間たち」という題で展示会をしました。これまで都合3回展示会をしてきた中で、いろいろな資料を頂いてきました。また、館のほうでも、それに関係する資料を収集してきましたので、平成10年度の事業として特別展示室を利用した杉並文学館を作ろう、ということでオープンしたわけです。本日の話は本当は、ここでというよりも博物館へ来て頂いて、そこでお話することがいちばん良かったのかな、と今、思っています。

会報の中で民俗学か何かをお話しする、というお知らせになっていたかと思うのですが、このお話を受けたときには、具体的に何をお話しするかは決まっておりました。しかし、いろいろな話をしていくうちに例会では文学の関係は、今まであまり話されていないようでしたので、今回は文学の話を見せて頂くことにしました。スライドを見て頂きながら話を進めていこうと思っています。

それではスライドを見ながら、ご説明させて頂きます。

こちらは、展示場の風景です。こういった形で模型などを使いながら展示を致しております。

次へお願いします。

これは、井伏鱒二さんの『荻窪風土記』ですが昭和57年に出されました。その前は、昭和56年まで「新潮」に連載されておりました。そのときは「豊多摩郡井

荻村」という副題ですと連載をされていたのですが、一冊にまとめられるときに「荻窪風土記」という題になりました。こちらは、館に頂いた物で、井伏さんのサインと、上に乗っておりますペンは「ペリカン500」という万年筆です。

次へ、お願いします。

井伏鱒二さんの『荻窪風土記』は、ご自身の経験だけでお書きになっているわけではなくて、地元の古老の方にいろいろお話を伺うなどして書かれています。その中の一人で、矢嶋又次さんという郷土史会の元会員の方がおられます。既にお亡くなりになってはいますが、荻窪駅の北口で衣料品屋さんというのでしょうか、足袋屋さんなどを営んでいらした方です。大正から昭和の荻窪辺り、あるいは青梅街道をずーっとさかのぼって新宿までの道程のところですか、そういう絵をお描きになっていました。井伏鱒二さんも『荻窪風土記』を書くときに、矢嶋さんの絵を見ながらお書きになっていた部分がありまして、たびたび「矢嶋又次さんの絵に、どうなっている。」という引用が出てきます。

これは、大正初期の荻窪駅辺りをお描きになった絵です。こちらのほうに川が流れています。今はもう無いのですが、玉川上水から千川上水に用水が引かれているわけです。その流れの一部が青梅街道沿いを、ずーっと流れておりまして、青梅街道の北側にある杉並第七小学校の辺りで青梅街道から離れていく、という用水があったのですが、そういった様子も描かれています。

次を、お願いします。

これが、井伏鱒二さんの原稿です。井伏鱒二さんは昭和2年に杉並にお住まいになります。そのときちょうど結婚をされて新居を荻窪に定められました。その頃のことをお書きなっています。そこを讀んでみます。

「私は昭和2年の初夏、牛込鶴巻町の南越館という下宿屋からこの荻窪に引越してきた。その頃、文学青年たちの間では、電車で渋谷に便利なところとか、または新宿や池袋の郊外などに引越して行くことが流行のようになっていた。新宿郊外の中央沿線方面には三流作家が移り、世田谷方面には左翼作家が移り、大森方面には流行作家が移って行く。」と、このように当時のことを、お書きになっています。これを証明する形で、中央沿線の特に阿佐ヶ谷辺りに、まだ売れない作家が集まって来るということで、後ほどお話しする阿佐ヶ谷文士の形が出来上がってくるのだらうと思います。

次をお願いします。

これは、井伏鱒二さんが作品をどういうふうに仕上げていくのか、というところを見て頂こうということでご用意しました。これは、印刷になった元の原稿です。特に、この辺りを見て頂きたいのですが、「『おっさん、この土地を貸してくれないか。』と言った。相手は麦の根元に土を掛ける作業を止して、『貸してもいいよ。坪七銭だ。去年なら、坪三銭五厘だがね。』と言った。」と、こういう文章です。

次を出して頂けますか。

これは、井伏さんのお宅から頂いたものなのですが、その草稿と言いますか、印刷された原稿が書かれる前の文だと思えます。ちょうど同じところですが、「『小父さん、この畑、小父さんの持つていゐる畑かね。』」「相手は麦の根に土をかける作業をやめた。『そうだ。俺の畑だ。』『この辺、区画整理してあるから、家を建てさすんだらうね。僕に貸してくれないか。』」と、こういう文章です。先ほどの非常に印象的な「おっさん、この土地、貸してくれないか。」という文と、この部分の「小父さんの畑ですか。」というところ。それに対して、向こうが「さうだ、俺の畑だ。」と言っているところは、全くその作品の部分と違うと思うのです。このような下書きを経て井伏さんの作品が仕上がっていくということを見て頂きたい、ということで展示をしています。

次をお願いします。

これは、「平野屋酒店」という井伏鱒二さんの『荻窪風土記』の原稿です。昭和2年に井伏さんがお住まいになるときに、自分で間取図をお描きになりました。今のお宅は昭和34年に建て替えられていますので、34年までお住まいになっていた旧宅は、ご自分で間取図をお描きになったということをお書きになっています。当時、早稲田の鶴巻町にお住まいでしたけれども、「下宿に帰って、原稿用紙の裏にフリーハンドで建築設計図を描いた。」ということをお書きになっています。「八畳、六畳、三畳に、廊下を隔てた四畳半の離れに六尺幅の書棚をつけた。骨董品を入れる四畳半の物置部屋もつけてみたが、建築費が嵩張りそうな気がするので取り消した。押し入れは広くする必要ないと思って、六畳間に九尺幅のを一つつけた。」というふうに、かなり細かく、どういうお宅だったかということをお書きになっています。

実は、この辺りが井伏鱒二さんの杉並での原点ではないかと思えます。井伏鱒二さんは昭和2年に杉並にお住まいになって、それから作家として名を成していかれるわけです。その後、戦争中の一時期、杉並を離れられて、お生まれになった福山ですとか甲府などに一時お住まいになったことはありますけれども、ほとんどは杉並にお住まいでした。作品もそちらで作成されていました。ということは、この家というのは井伏鱒二さんの作品とともに、ずっと過ごしてきたところで、原点ではないだろうかということです。それで、どうしても、この家を復元してみたいと我々は思ったわけです。

次をお願いします。

井伏鱒二さんの現在のお宅を設計された広瀬三郎さんという建築家がいらっしゃいますが、その方が「井伏鱒二全集」の「月報」に、このような井伏邸の見取図をお描きになっていました。ここに「昭和34年4月20日迄あった旧宅」と書かれています。この北側のところに「つぎたした部分」と書いてありますから、この部分は継ぎ足されているわけです。8畳や4畳半、6畳、3畳この辺りは、先ほどの文章に出ていたところだと思えます。この辺の3畳などは出ていないので、その辺を調べていかないと昭和2年の復元図は出来ないということになりました。

ちょうど広瀬三郎さんの文章の後半部分に、千葉県の大原にこの建物の一部

が移っているようだ、ということが書かれていました。調べましたところ、井伏鱒二さんのところに学生時代からよく出入りされていた、所さんという方がいらっしやいまして、その方の奥様が井伏さんに非常に可愛がられて、目をかけられていたということです。その方が大原に土地をお持ちで、「潰されるのは忍びない。」と、そちらへ移築したということです。そっくりそのまま移築しているわけなのですが敷地との関係で、この6畳は最初から移築しなかったということです。我々が電話で連絡をとりましたら、まだお宅はある、ということでしたので大原へ調査をしに伺いました。行ってみたところ、この8畳間は井伏さんが作品をお書きになっていた、いちばん重要な部分ですので、特に気をつけて保存が図られていました。この辺りの3畳とか、この辺り(6畳・台所)は使い勝手の問題がありますので、かなり変更されておりましたけれども、ここからこの部分(8畳、4畳半)については、そのまま残っておりましてので、そこから復元図を起こして復元することに致しました。

次をお願いします。

我々が復元した昭和2年当時の井伏鱒二さんのお宅は、こういう形だっただろうと考えました。

先ほどお話しましたこの部分(4畳半)、押入れがこの図ではありません。柱を調べますと昔、外に出ていた部分というのは雨風で傷んでおります。これは風蝕というのですけれども、そういった痕跡を調べてこの復元図を作ったわけです。この図の、こういうところの柱の裏側に風蝕が見られましたので、確かに押入れは後から作られたものだということです。こちらの部分にあった風呂場なども無くなっています。昭和6年だと思えますけれども、林芙美子がヨーロッパへ旅立ちます。そのときに、井伏さんに風呂桶を贈られているのです。林芙美子から頂いた風呂桶をきっかけに井伏さんのところでは、この部分にお風呂を増築されました。

それから、こちらの部分(6畳)、これは押入れになっています。解体されたときは、この上に3畳の部屋がついていました。この図で言いますと、先ほどの井伏さんの文章では、押入れは一つだということ、あるいは戸棚をここに付けた、というようなことがぴったり合ってまいります。これを元に20分の1の復元模型を作りました。

次をお願いします。

作った模型が、これです。先ほどの建物だけですけれども、こちらのほうでは、こういった形で樹木も入れています。

次をお願いします。

これは、太宰治が井伏さんに差し上げた「やぐらこたつ」です。こういった物も、全く同寸法の20分の1で作っております。

次をお願いします。

これは太宰の結婚式の写真で、皆さん、よくご覧になると思います。結婚式の写真には二つのパターンがありまして二人で写っているものと、ご親族で写っているものです。そのご親族で写っているものの中には、井伏さんご夫妻も仲

人をされたので写っております。

次をお願いします。

今の写真を撮ったのがこの床の間の所です。こういった形で井伏鱒二さんのお宅には、井伏さんの作品が作成されたということだけではなく、いろいろな思い出が入っております。

次をお願いします。

これは太宰治と縁台将棋をしている所で、先程と同じ昭和15年頃のもので、ここに縁台がございませう。これも模型の中では同じような位置に配置してあります。

次をお願いします。

これは上から見たところですが、屋根は全部、外せるようになっておりますので展示のときに合わせて、屋根を取る場所を変えたりしております。こちらが6畳間で、こちらが押入れです。こちらが玄関で、入って来てすぐ3畳間がございませう。こちらが8畳間で井伏さんの書斎でした。これが先ほど申し上げた太宰のやぐらこたつです。それから、ここは構造上の問題で取り外せなくなっているのですが、ここをずーっと廊下が回っております。こちらがトイレです。こちらに4畳半があります。

何故これを見て頂いたかと言いますと、太宰治が最初、小山（おやま）初代さんという方と結婚されるわけですが、その方との仲がうまくいかなかったときに、一時、井伏さんが初代さんをお預りになるという時期がありました。そのときのことを井伏さんの「琴の記」という本の中では次のように書かれています。ちょっと読ませて頂きます。

「太宰君は初代さんが私のうちにある間にも、度々私のうちへ将棋を指しに来た。そのつど初代さんは茶の間か台所にかくれたが、書斎と居間を兼ねた私の部屋は台所と壁一重で隣である。私のうちは建坪が少なく、茶の間から便所へ行くには私の居間を通らなければならないので、初代さんは便所へ行きたくても我慢しなければならないことになる。だから私は将棋は一番だけにして太宰を誘って外出する。」という文章です。

これについて、解説をお書きになった作家の方とお話をしたのですが、そのとき、「この状況がよく分からなかった」とおっしゃるのです。この図を見て頂くと分かるのですが、初代さんたちは多分この辺り（6畳）に居るわけですが、ここは台所です。先ほど申し上げたトイレはこちらです。井伏さんたちはこの書斎（8畳）、あるいはこの廊下で大体、将棋を指していらっしやるわけですが、そうすると、トイレへ行こうとするとどうしても、こちらから、こう行かないと（6畳 廊下 トイレ）いけないわけですが、ですから将棋を一番指しただけで外へ誘って外出するというような状況が、この模型を見て頂くとよく分かると思います。

それから、これは直接、文学とは関係ないのですが、この模型をご覧になったある作家の奥さんが「ブフッ」と笑われたのです。それで「どうしたんですか？」とお聞きしましたら、「男の考えることは、皆おんなじだ。」と



おっしゃったのです。「どうしてですか？」と聞きましたところ、「実は、うちと同じだ。」とおっしゃるのです。自分の住みやすい場所というのは、自分たちで取ってしまって、自分の使わない所は後ろのほうへ持って行ってしまおう。これを見るとそうなのです。ここが台所ですが何かあっても、ぐるーっと回って行かなければいけない。ここは全く入り口がありません。ここだけです。ここからこう回って行かなければなりません。それで、この模型をご覧になって、全然、相手のことを考えない男の身勝手だ、というふうに笑っていらしたようです。

ここは座り流しになっております。昭和2年当時の杉並の生活というのは、こういう座り流しで、こちらに井戸がございますから、こちらから水を汲んで来ておいて洗い物などをしました。焼物などは七輪を出して外で行ったというお話です。そういう昭和初期の、杉並での生活の一端も見て頂けるのではないかと思います。

次をお願いします。

これは、先ほどお話した井戸ですけれども、このように全く同じような形で復元しています。これについては、井伏さんの作品で「あしなが蜂」というものがありますので、その中をちょっと読ませて頂きます。

「お天気のいい日に私が井戸端で顔を洗つてみると、あしなが蜂は井戸のポンプを汲む音をききつけて井戸端に飛んで来る。そしてコンクリートの流しのふちに軽くとまり新しく流れ去る冷たい水に口をつける。それはきつと水の匂いをきいて飛んで来るのではなく、冷たい水の流れ去る音をききつけて飛んで来るのにちがひない。井戸端の大盥の陽なた水を流しても、いつかうに蜂の飛んで来るためしがない。」という、こんな文章があります。まさに、ここにこういう大盥があってという状況だと思いますが、こういう作品に出てくる部分をそれぞれ、あちらこちらに配置しています。

次をお願いします。

これは玄関脇の所にある「手洗鉢」です。こちらもまさに「手洗鉢」という作品がございまして、それも読ませて頂きます。これは、買ってきた手洗鉢が、あまり情緒がないので田舎から苔を送ってもらい、それを井伏さんがとぎ汁で貼り付けていき、それを生やそうとされていた時のことです。それが、うまくいかないというところで「『もう一度、苔を送つてもらつて、今度は糊で貼りつけたらどうでせう。私、手紙を書きますから。』家内は冗談でもなさうに云つた。苔を摺りつぶして米のとぎ汁で貼りつけるのも、完全な苔を糊で貼りつけるのも同じだと云ふ。『止してくれ、もう結構だ。』と僕は大きな声を出した。『苔が生えるのと苔を貼りつけるのは、おのづから別ものだ。僕の躍起になつてゐるところを、愚弄してはいかん。』『でも、いつか貴方は、桜んぼの実を木に結びつけたでせう。貴方は自慢してらつしやつたでせう。あれは、苔を貼りつけるのと同じやうな趣味ですわ。』『あれとこれは、同じやうで別のものだ。それが分らんか。』」と、こういうような作品です。

その題材に出てくる「手洗鉢」がこちらです。これも寸法を採ったり写真を

撮ったりして、全く同じような形にして作っております。

次をお願いします。

これは、玄関の前に立っている木です。この辺りに赤い実がついています。いま読んだ後半の部分、「桜んぼの実を結びつけた」というところですが、ご家族にお話をお伺いしましたところ、実は本当の話なのです。井伏さんがお買いになって来て、これを糸で結びつけていらしたとういのです。井伏さんの作品は私小説ではないので、あまり自分のことをお書きになりません。ですから、「井伏さんと奥さんの仲が良いのかどうかも分からない。」、というようなことを作家の方が、よくお書きになったりしています。でも作品をよく読んでみますと、こういう形で家のことが結構あちらこちらに出てくるのです。それで、その辺を楽しんで頂こうということで作っております。

次をお願いします。

皆さん、よくご存知のものだと思いますけれども『厄除け詩集』です。『厄除け詩集』の中に、「歳末閑居」という題のついた詩がございます。ちょっと読んでみます。

「ながい梯子を廂にかけ 拙者はのろのろと屋根にのぼる 冷たい棟瓦にまたがると こりゃ甚だ眺めがよい ところで今日は暮の三十日 ままよ大胆いっぷくしていると 平野屋は霜どけの路を来て 今日も留守だねと帰って行く 拙者はのろのろと屋根から降り 梯子を部屋の窓にのせる これぞシーソーみたいな設備かな 子供を相手に拙者シーソーをする どこに行って来たか拙者は子供にきく 母ちゃんとそこを歩いて来たという 凍えるように寒かったかときけば 凍えるように寒かったという」これは、「四季」という詩の雑誌に昭和11年頃お書きになった詩なのです。『荻窪風土記』の中にもこれは引用されていて、その前の部分でこういうことをお書きになっています。「隣家が引越しの置き土産として残していった梯子を題材とした詩。『それを明け放した窓の敷居に載せ、三つになる子供を相手にシーソー遊びをすることがあった。梯子のまんなかごを敷居に当てて、畳の方に出ている踏棧の一面に子供を置き、ヤツデの木の生えている方に私が立って、ゆっくり漕ぎながらギッチラコをやるのである。私はこのシーソー遊びのことを詩に書いた。後にそれを同人雑誌『四季』再刊一号に出した。」と、このような文章をお書きになっているのです。

私どもは、先ほどのような形で、作品などを模型の中に再現をしたいということで考えていたのですが、「じゃ、これはどこなんだろう？」といろいろ興味が出てまいりました。それで、次の写真にあるように、廂に梯子をかけて上ったというのは、こういうことではないかと考えました。実は、今の文章の中にヒントがございまして、窓の外にヤツデが生えています。そこに井伏さんが立って「ギッチラコをやる」ということが書いてあるわけです。先ほど広瀬三郎さんの見取図がありましたが、その中にも木がいくつか描かれています。それで見てみますと、ここにヤツデがあります。そうすると、「どうもこの窓があやしいんじゃないか？」ということになりました。



次の写真を、お願いします。

どうもこういう状況だったのではないか、というふうに想像したのです。まさにお子さんと遊ぶということで、「あってもおかしくないな...」「ほほえましい光景かな...」と我々は考えていました。しかし、いろいろ調べていたら、井伏鱒二さんが、この詩について「心象風景だ」という言い方をされているのです。ものによって幾つか違う言い方をされている部分もあるのですが、この部分については「心象風景だ」とおっしゃるのです。このように、井伏鱒二さんの作品というのは、けっこうありそうで無かったり、あるいは先ほどの、まさか木に桜んぼの実を結びつけるなど、井伏さんがしそうなものと思ふようなことを実はいらしたりとか、作品と実際の生活との間にいろいろな関係が出てくるというのがおもしろいところですよ。

もっと考えていきますと、井伏さんの作品の作り方の特徴として、「諧謔性」というような言い方をされます。例えば、「亡友の諧謔」という作品を井伏さんがお書きになっています。これは、川へ鮎釣りに皆で出て行った時のことらしいのですが、ある県の招きで、議員も釣り舟に乗って鮎釣りをしていたということです。そのときに、ボラが飛び込んで来て、舟に乗っていた芸者の裾にもぐり込んだという部分のようです。そのところは、井伏さんの文章ですと「『あなた、お握りになりますか。』私がボラを議員さんのほうに差し出すと、『いえ、結構です。』と議員さん。そつげなく答えた。気まづい思ひが一座に行き渡つた。芸者はボラの引つくり返したお銚子を片づけてみた。みんな黙りこんでしまつた。『士郎さん（これは、尾崎士郎ですけど）このボラをどうしたらいいだろう。』と私は尾崎君の判断を仰いだ。...尾崎君がどう答えたかは伏字にしておくが、そのときみんながどつと笑つたことだけはぜひとも付記したい。」というようなことを、お書きになっています。

このときちょうど一緒にいた中村地平という方は、「水郷延岡」というものを書かれましたが、その中では、「一同は順ぐりにまわして、掌のなかに握りしめていた。触感には、丁度赤ん坊の腕をにぎりしめた時のような、小さな生きもののみを感じる、哀しいなつかしさがあつた。井伏鱒二さんは席に侍る一小婢に、鄭重な言辞ですすめた。『あなたも、お握りになつてごらんになりませんか。』その言葉には、どういうわけか妙な言うにいわれぬおかしさがあつた。舟のなかいつぱいに賑やかな笑い声が湧いた。」と、こういう文章に替わっています。実は、この部分、井伏さん本人が言ったことを他の方が言ったような形で、お書きになっています。

他の作品などでも、そのような書き方をされています。例えば、伊藤整のことについて井伏さんが何か書かなければならなかったときに、上林暁さんのところへ聞きに行き、いろいろ話をしていて「そうか何も無いのか」「伊藤整にはエピソードが無いことが、エピソードだな。」と、自分でおっしゃっていたということです。それが、後で作品になってみると上林暁さんが言ったということにすり替わっているのです。こういう「すり替え」をよくなさっています。ただ、そのときに井伏さんは相手のことを持ち上げる形で、そのような書き方

をされているのです。当然、作品ですから事実と違うと言えは違うのですが井伏さんの作品の中には、そういう面白さが隠れているところを、この模型を見ながら楽しんで頂きたいと思います。

次をお願いします。

これはオマケなのですが、井伏鱒二さんが昭和34年に建て替えられたお宅の書斎です。この写真は書斎そのものの写真ではなくて、郷土博物館で追悼展をしたときに展示室に復元をした建物なのです。今、福山に福山文学館が出来てまして、そちらにはうちから図面を提供しましたので、これと同じ物が作られていると思います。井伏鱒二さんの書斎は、このような感じだというご紹介です。

次をお願いします。

これは、『日本幽囚実記』というものです。井伏さんが作家として売れる前の大正末期、聚芳閣という会社に勤めていました。その聚芳閣を、訳があって辞めたということをお書きになっています。それは何故かと言いますと、この本を出すときに自分で編集を担当していたのですが、奥付けを付けるのを忘れたために、とんでもないことになって恥ずかしくて辞めた、というふうにお書きになっているのです。けれども、どの本を探しても奥付けは付いているのです。この辺もちょっと分からないのですが、井伏さんの諧謔の一つではないか、ということでご紹介しました。

次をお願いします。

これは、井伏さんの最初の作品です。『夜更けと梅の花』と言います。「新興芸術派叢書」として新潮社から出たものです。これが認められて井伏さんは、作家としての地位を獲得していくことになります。

次をお願いします。

これが、「ジョン万次郎漂流記」の最初の部分です。これで、第6回の直木賞を受賞しています。ここで本当に、一流と言いますか作家としての地位を固めたということだと思います。

次をお願いします。

これは、有名な「はなにあらしのたとへもあるぞ さよならだけが人生だ」という句です。それと、「わしの在所は、どこだかみえぬ いぬいのかたは ひだのやま」という句です。これも、それぞれ「唐詩選」という中国の唐の詩を訳したものです。実際は、もう少し長いもので、こういう形になっています。最初のほうは「勸酒」という詩です。「君に勸む金屈屈(きんくつし) 満酌辞するを須(もち)いず 花発(ひら)けば風雨多し 人生別離足る」「コノサカヅキヲ受ケテクレ、ドウゾナミナミツガシテオクレ、ハナニアラシノタトヘモアルゾ、『サヨナラ』ダケガ人生ダ」と書かれています。これは井伏さんと言えはよく出てくる文章です。

次をお願いします。

『田園記』という井伏さんの本がございます。その中で、この詩については、もと詩があるのだということ、また、お父様も文学をなさっていたので、

その書付けの中に唐詩を訳したものがあって、それを下敷きにして書いたのだ、というようなことをお書きになっています。それも、井伏さんの諧謔性と言いますか、井伏さんの手ではないか、と一般にこれまで言われていたのです。けれども、もと詩になっているものが発見されて井伏鱒二さんの文章はそのまま写しただけではないかと一時、話題になったことがあります。ただ、比べてみますと大部違っている部分があって、その部分がやはり井伏鱒二さんの持ち味なのだろうと思います。

次をお願いします。

これは、「三好達治の河童の暖簾」です。「波」という新潮社が毎月出しているPR誌みたいなものですがけれども、その中に載ったものです。

次をお願いします。

これが、その中で書かれていた「河童の暖簾」です。文学関係のものをお読みになっていると「銀座の長谷川」というのがよく出てくると思います。あるいは、ここでは「出雲橋」と書いてあります。これは、文芸春秋が近くにあったことや、久保田万太郎さんが近くにお住まいになっていたこともあり、文学者あるいは編集者などが酒を飲みに行った場所なのです。その場所で、清水崑さんがカッパの絵を描き、三好達治さんが詩を書いて、それを店に掲げたということなのです。これは、生誕100年展のときに長谷川さんからお借りして写したものです。これとは別に河童の絵がなくて残念なのですが、文字だけの小さなものを作ってお配りになったようで、これは館にも頂いたものがございます。

次をお願いします。

井伏さんはいろいろと趣味をお持ちですがけれども、その中の一つに釣りがあります。こちらは郷土館に頂いています釣竿で、いわゆる「京竿」と言われているものです。ヤマメを釣ったりするものだそうです。

次をお願いします

こちらのほうは「関東竿」で、ヘラブナを釣るということです。こういった物も展示しております。

次をお願いします。

井伏さんは小さいときから絵がお好きで、作家になる前は画家になりたい、橋本関雪さんのところへ弟子入りしたい、というような考えも一時あったようです。非常にお好きで、こういう形でご自分の著書にも絵をお書きになっていらっしゃるようです。

次をお願いします。

こういう伊馬（伊馬春部 いまはるべ）さんですとか河盛好蔵さん、けい子さんやす子さんという飲み屋の方だと思いますけれども、こういうようにサッサッと即興画みたいな形でお描きになるものもあるようです。

次をお願いします。

これは、焼物なのですが、似たような絵をよくお描きなっています。いちばん下の「柴舟図」という赤い絵ですが、これは館に所蔵しています。平成

10年に「生誕100年記念」展を行ったときに展示しました。井伏さんが新本画塾と一緒に通っていた方がお持ちになっていた絵が、これと同じ図柄なのです。色は違います。これと似たような図を、よく描かれることはあるのですけれども、何か非常に、この図柄にこだわっていらしたのかなと思います。実際、作品の中でも「取材旅行」という中で、九谷へ旅行に行ったときに、こういう図を描いたということをお書きになっています。一般的に日本美術の分野ですと、このような図柄は「柴舟図」と呼んでおり、私のほうで勝手にこのような名前を付けてしまっているのですが、先ほどの「取材旅行」の中では「焚木船」と井伏さんはお書きになっています。日本画のほうでは柴舟という形で一つのモチーフになっておりまして、宇治橋の情景を描いたところに、この柴舟が出てくるというふうに一般には使われています。ですから、そういう絵をご覧になって何か気になる部分があったのではないかと、あるいは作品と何か、からんでくる部分があるのかなと思っております。

次をお願いします。

最初に申し上げなければいけなかったのですが、杉並文学館は三つのコーナーに分かれております。いちばん最初は「井伏鱒二と荻窪風土記」という、井伏さんを紹介するコーナーです。次が「阿佐ヶ谷文士」のコーナーです。それから最後は「杉並の作家」ということで三つのコーナーに分かれています。それで、これが二つ目の「阿佐ヶ谷文士」のところですよ。

阿佐ヶ谷文士というと、まず浮かぶのは阿佐ヶ谷の北口にありました「ピノチオ」という中華料理屋さんのことです。その「ピノチオ」というのは、こちらの佐藤春夫さんがお書きになっている色紙には「ピノヒオ」となっていますが、「ピノチオ」のことだと思います。大正14年に佐藤春夫さんが「ピノチオ」を翻訳されて出されています。ちょうど同じような大正14年頃に、永井二郎さん、永井竜男さんのお兄さんにあたる方で、報知新聞の記者をされていたという方が、そちらを辞めて阿佐ヶ谷に中華料理店を作られたようです。大正14年には既にあったということで、開店はもう少し早いかもしれません。「ピノチオ」という名前からして、また、出された本が14年ということも考えると、たぶん大正14年頃だと思います。当時、中原中也と同棲をしていた女優の長谷川泰子さんという方が、後にインタビューの中で大正14年にピノチオへ行った、というようなことを話していらっしゃいますので、確かに大正14年にはあったのだと思います。

次をお願いします。

その「ピノチオ」を復元したのが、こういう図です。「阿佐ヶ谷文士」、「阿佐ヶ谷会」という言い方をしていますけれども、阿佐ヶ谷文士は最初、将棋を指すということで阿佐ヶ谷駅周辺の将棋屋、あるいは会所というのでしょうか、そこに集まっていたようです。ところがそこに来る人が皆、殺伐としている、賭け事で一喜一憂しているということで、文士の皆さんが嫌がられて、それで「ピノチオ」を借りて、こういった会をするようになったようです。お店の場所は阿佐ヶ谷駅北口にある西友の前辺りらしいのです。

こちらがお店です。井伏さんたちは、この裏をお借りになって、ここで阿佐ヶ谷会を開催されていたということです。皆でワイワイやった後、こちらのほうで食事をされるというような場所であったようです。これは、昭和16年頃を想定して復元しております。

次をお願いします。

これは、阿佐ヶ谷会のメンバーの「寄せ書き色紙」です。その中のメンバーであった木山さんとか青柳さん、浅見さん、小田さん、という名前が挙げられています。

次をお願いします。

これも色紙です。「はしけんをする人が ひとり欠け」と井伏鱒二さんが書いています。これは、戦争中に皆さん疎開するわけですが、上林さんが田舎に帰られたときに皆が書いたものです。「土佐の大方町から...」と書いてあります。

次をお願いします。

これは、阿佐ヶ谷会の「開催通知」です。昔は電話がありませんので、こういう形で通知が来て開かれたようです。

次をお願いします。

これは、三好達治さんがお書きになったものです。「十三日のための記、亀井さんおめでとう」と言っているのが、亀井勝一郎さんが賞をお取りになったことではないかと思えます。「欠席します」と書いてあります。それから、井伏さんがお書きになった「遥拝隊長」ですが、このことで「遥拝隊長御恵贈ありがとうございます」という文章があります。この「遥拝隊長」というのは、先ほどお話しした建物を移築されていたという方の奥様が、井伏さんのところで、いろいろ手伝いをされていたときに、千葉の大原であった話を井伏さんにして、それを元に「遥拝隊長」を井伏さんがお書きになったようです。

次をお願いします。

これは、昭和29年に撮られて雑誌に出たものです。こちらが井伏さんで、そして上林さん、外村さん、青柳さんです。実は、阿佐ヶ谷会というのは二つの流れがあります。一つは、お酒を飲んだり将棋を指したりという部分で、もう一つは芸術を鑑賞すると言いますか、そういう部分も流れとしてはあったようです。ですから、皆さん集まって、こういうような形で骨董の話がされたり、場合によっては青柳瑞穂さんが中心になって国立博物館に見に行くということもあったようです。ここにちょうど、こういう仏像が出ています。これは、藤原仏なのですが博物館に展示しております。

次をお願いします。

こういう様に皆さん、料理を持ち寄ったりしていたようです。阿佐ヶ谷会の状況というのは男性側からしか出て来ないのですが、女性がお書きになったものとか、いろいろお話を聞いたりしていますと、一人一品持ち寄りということもされていたようで、こういう形で皆さんワイワイとなさっていたようです。

次をお願いします。

これは、青柳瑞穂さんの「ふくろふを買ふ」という自筆原稿です。青柳瑞穂さんにご専門はフランス文学で、翻訳や詩をお書きになっているわけですが、先ほどからお話している骨董などに非常に造詣が深い方です。一昨年お孫さんの、いづみこさんが『青柳瑞穂の生涯』という本をお書きになっています。それを読んでみますと、先ほどのような形で、青柳瑞穂さんのところで阿佐ヶ谷会が開催されているのですが、阿佐ヶ谷会が行われていないときでも、阿佐ヶ谷で皆さん飲んでいると酔払って夜中に、どんどん青柳さんのお宅へ訪ねる、とういことがあったようです。

それで、最初のうちはフランス文学がどうこうと話をしているのですが、だんだん酔いがまわってくると、いろいろな卑猥な歌などを歌い出すというようなことがあり、家族としては非常に困っていたという部分が出ています。他の女性の話を聞いても、何か一品を持って行かなければならない、それも戦争後の、物やお金が無いときに持ち寄らなければならぬというので、裏方ではかなり苦勞をされていたようです。その辺の部分というのは、あまりまだ出て来ていないようです。

いづみこさんがお書きになっているものの中でも、このフクロウの話は出てきます。青柳瑞穂さんが阿佐ヶ谷の辺りを歩いていて、街角の小鳥屋さんでフクロウを見つけたので、それを買ってきたことがあったようです。いづみこさんの書き方によると青柳さんというのは「あまり筆の進むほうではなかった。」ということです。ですから、ちょっと書いては筆が進まない町の中をぶらつく。その中でフクロウを見つけてきたということで、それを題材にこういう形で作品にしたということです。「フクロウを買う」という話と、もう一つフクロウを題材にしたものがあったのですが、フクロウが逃げたことなど、こうした日常を題材にしてお書きになっているようです。

次をお願いします。

青柳瑞穂さんの作品で有名なのは、この『ささやかな日本発掘』という本です。これは青柳さんが、骨董に造詣が深いということで、発掘談を書いたものです。青柳さんにしてみれば、はっきり言って、川端康成などのように、お金があって良い物を買うのとは違い、杉並辺りの骨董屋さんから、こういう掘出物を見つけることのほうが骨董の極意だ、という考え方があったようです。そういう苦勞をして骨董を手に入れる場面をよくお書きになっているのが、この『ささやかな日本発掘』という本です。

その中でも圧巻は、光琳が描いた唯一の肖像画といわれています。これを発見したときのことを『ささやかな日本発掘』の中にお書きになっています。蚕糸試験場の近くに骨董屋さんがあったそうですが、その骨董屋さんに行ったときに、どうも骨董屋さんの仲間らしいのですが、その方と「切る、切らない」というようなもめごとがあったようです。

ここに、「法橋（ほっきょう）光琳」という名があります。その当時、光琳の描いた肖像画は無いと言われていました。それで、そのような物があるわけは



ないということで、同業者としては偽物として売るよりも、名のない本物として売ったほうが売りやすいということ。また買う場合は「これは偽物だから」ということで値を下げて買おうとする、その辺の駆け引きで「法橋光琳」と書いた部分を切り取って買おうとするわけです。だけど、売るほうとしては少しでも高く売りたいということで、それを「切る、切らない」という論争をしているわけです。それを、青柳瑞穂さんは横で見ていたらしいのですが、その場では話がつかずにお客は帰ってしまうわけです。その後それを見せられて、ぜひ欲しいということになり、いづみこさんの書き方でいうと靴が一足ぐらい買えるような値段でお買いになったらしいです。

その後、国立博物館の文化財研究所のようなところへ行って調べているうちに、これはどうも本物だということになり、今は大和文華館というところに入っていますけれども、そこへ売られた後、重要文化財になった品物です。ですから、こういった形で場末の本当に安い値段で取引されているものの中に、美を見つけ出すというところに骨董の趣味の価値を青柳さんは置いていたようです。

次をお願いします。

これは青柳さんがお書きになった色紙です。「とほたふみの いなさほそえの水よりも 青きこの壺 めでたかりけり」とあります。「とほたふみ（遠江）」というのは、奥さんの実家のあるところなのです。そちらのほうで、川のところから古い壺を発見されたそうですが、それは青い釉薬がかかっている壺だったらしいのです。それが、やっぱり後に、昭和40年代で500万円か何かで売れたというようなことを書かれています。青柳さんは掘り出してくることも含めて、美術品を見つけ出すということころに、骨董の価値を見出しておられたようです。他の本を読んでみますと、青柳さんは物を愛されると、例えば壺を買ってきて気に入ると、一緒にお風呂に入って洗うとか、風呂桶の中に一緒に浸かるなど、そういうこともあったようです。それくらい物に対する愛着があったようです。

次をお願いします。

次は上林暁さんです。「白い屋形船」が代表作と言いますか、読売文学賞を受賞されました。下のほうに「再度の大病に倒れる」と出ていますけれども、この方は2度目の脳溢血で右半身不随になりますが、それでも作家は作品を書かなければいけない、ということで原稿用紙に向かわれるわけです。

次をお願いします。

右手が使えないので左手で原稿をお書きになるのです。これは作品にはなっていないのですが「滝井孝作あれこれ」という題で、滝井孝作さんのことをお書きになっているようです。こういうしっかりした文字は、妹さんの文字ですけれども、こういう形で、左手でもとにかく原稿を書く頑張っていたということです。

次をお願いします。

これは妹さんの文字です。展示でもご紹介しているのですが、こういう形でお

書きになったものを、妹さんが口元を読みながら文字にしていくなど、口述筆記という形で作品をお書きになっていられました。倒れられてから、こういう形でお書きになったものが読売文学賞として認められたのです。特に、「阿佐ヶ谷文士」という、作家ではなく文士という形で表示をしておりますのは、こういった壮絶と言いますか文学に対する情熱などの部分を「文士」という言葉で表現したいということで「阿佐ヶ谷文士」としてご紹介しております。

次をお願いします。

これは、そのときのハガキです。編集者に「お手紙ありがとうございました」とあり、どういう形であっても作品を書きたいということで出版社へ、こういう形のハガキをよく送ったようです。この辺も文学に対する姿勢と言いますか、その部分を見て頂こうと思ひ、お見せしました。

次をお願いします。

これは、倒れられる前の「高麗村」という原稿です。戦争中の作品で、昭和18年の12月に「阿佐ヶ谷会練成忘年会」と銘打って、阿佐ヶ谷会のメンバーの中の安成二郎ですとか、小田嶽夫、平野嶺児、青柳瑞穂、外村繁、太宰治というような人たちが、高麗村の高麗神社に行ったときのことを書いたものです。

昭和18年という押し迫った年ですけれども、神社のもてなしは一汁一菜と聞いて行ったところが、いろいろなご馳走が出て、皆お弁当持ちで行ったのに、お弁当を食べるまでもなくお腹一杯になったということが書かれています。帰りに電車やバスなどがなかなか来なくて、震えながら太宰や青柳が弁当をほおばっている、という場面なども出てまいります。

次をお願いします。

これは、外村繁さんの「花筏」という作品です。外村繁さんは滋賀県の方で、梶井基次郎さんや中谷孝雄さんなどと昔からつながりのあった方です。もともと近江商人のお宅ですので、商人物の小説をお書きになった方です。これは「花筏」ですけれども、最初は「草筏」で第1回目の芥川賞の候補になって、その後「筏」、「花筏」と20年以上つなぎながらお書きになり、「筏」で野間文芸賞をお取りになりました。この方についてのエピソードはあまり無いのですけれども、次のようなお話があります。

昭和22年頃に、阿佐ヶ谷会のメンバーたちが作っていた「素直」という雑誌がありますが、その編集を手伝っていた真尾（ましお）悦子さんという方がいます。旦那様のほうは「文壇」という文芸雑誌の編集をされていた方です。その方が戦後一時、外村さんのところに下宿と言いますか、一緒に住んでいたということで、そのときの状況を『阿佐ヶ谷貧乏物語』という本の中でお書きになっています。

作家というのは髪をかき乱しながら文章を書いていて、うまくいかないと、くしゃくしゃと原稿用紙を丸める、というような感じを皆さんもお持ちになるのではないかと思います。しかし、この本を見ていますと外村さんの場合はそうではなくて、横で見ているとサラリーマンのように時間にもきっちりしていて、時計がいらないくらい夕方5時になるとピタッと仕事を止められる。そし

て、万年筆を置く音が5時ちょうどにピタッと鳴る。時計もいらないくらいだ。というようなことをお書きになっているのですが、外村さんは、そういう方だったようです。

次をお願いします。

これは、外村さんが「筏」の賞を取ったときに、本をそれぞれのメンバーに贈られました。そのときメンバーから送られてきたお礼のハガキです。いちばん端が井伏鱒二さんのものです。真中は小田嶽夫さんだと思います。いちばん左は木山捷平さんの筆跡だと思います。

次をお願いします。

これは「細胞文芸」という雑誌です。太宰さんは青森の、かなりの資産家の家に生まれていますので、高校生時代からこういったものを自分で発行していました。太宰というと井伏さんとの関係が出てきます。最初、井伏さんが売れる前に「山椒魚」の元になる「幽閉」を「世紀」という同人雑誌に発表します。太宰治のお兄さんが、東京から帰郷するときに本や雑誌を持って帰るといふようなことがあって、太宰はそういったものから中央の文芸関係書を手に入れて読んでいたようです。その中の一つに多分混じっていたのだと思いますけれども、「世紀」にある「幽閉」を読んで、まだ名前の売れていない中で、こんなに将来性のある人はいない、と井伏さんを非常に買ひまして、自分で出しているこの「細胞文芸」にぜひ文章を書いて欲しい、寄稿して欲しい、ということで井伏さんのところへ談判するわけです。会ってくれなければ自殺をする、というところまで書いて迫ってくるわけです。それで、仕方なしに井伏さんは文章をお書きになるのですけれども、それが3号に載るのです。その後4号は発行されるのですが、それを最後に、この雑誌は廃刊になってしまいます。太宰は、その辺でもういい、と思ったのかも知れませんが、これが太宰と井伏さんの最初のつながりでした。その後、東大へ入るため昭和5年に東京に出て来ますけれども、それ以降結婚するまでは井伏さんの家近くの天沼辺りに転々と住んでいたということです。

ここでご紹介するのは、井伏さんが浅見淵さんに書いたハガキです。先ほどお話したように井伏さんの仲人で太宰は結婚しているわけです。このところに「太宰君が来たのでピクニックは欠席します。」と書いてあります。当時、ピクニックが流行っていたようでして、皆で、そういうものに出かけていたらしいのです。これは井伏さんが山梨にいたときの話なのですが、井伏さんもピクニックに誘われていたのですけれども、「太宰君が来るので欠席します」とあるわけです。ちょうどこれは、9月15日の日付になっているのですが、実は9月18日に太宰治は山梨の方と、お見合いをしているのです。それが、うまくいきまして先ほどの結婚式につながっていくのですが、その見合いのためだろうと思います。それを書いたハガキなのです。

次をお願いします。

これは、『井伏鱒二選集』の第一巻です。

次をお願いします。

これは、第一巻後記というところですか。ここに太宰治と見えております。太宰治が編集を担当して、何を選擇するかということも含めて行っていたようなのです。これは、昭和23年の3月から発刊になるのですけれども、23年というと太宰が入水する時期なのです。ですから、直前までこれをしていたということで、亡くなった後の5巻からは上林暁がこの編集後記を書くようになっていきます。実は、これを編集するときの太宰のメモが残っておりまして、それを見ると「ほんとうに井伏さんの文章は、名品だ」ということを書いています。

最近、太宰と井伏さんの関係を取り上げた論文と言いますか、本が幾つか出ています。一昨年の『ピカレスク』という猪瀬直樹さんがお出しになった本あたりからだと思えるのですけれども、そのあたりから太宰と井伏さんの関係というのを、また考えてみようというものが出てきています。それと合わせて、『ピカレスク』でも触れている部分でもあるのですけれども、『黒い雨』の書き方などが問題になっているわけです。

最近、太宰がこういう形で書いている部分と、非常に合わないという部分が最新の資料で出てまいりました。

次をお願いします。

これは、太宰さんの文学碑です。御坂峠のところに太宰さんの文学碑が建っています。

次をお願いします。

これが、その裏面です。表には「富士には 月見草が よく似合ふ」という太宰の「富岳百景」の文章の一部が出ています。裏のところは、井伏さんの筆跡で太宰が御坂峠にこもって「富岳百景」を書いたと、というようなところを紹介している文章です。こういう形で井伏さんと太宰の関係は、強いものがあります。

次をお願いします。

これですけれども、昨年、青森の近代文学館から出た資料です。太宰の手帳に書かれたメモです。昭和23年頃『井伏鱒二選集』の編集に関わっている時期だと思えます。井伏さんと太宰の関係で、いちばん有名なのは遺書と言いますか、その中で「井伏さんは悪人だ」と書いてあるのが、いちばん衝撃的に残っています。『ピカレスク』を書かれたのもこのことについてどうしてなのか、というところから発想が出ているようなのです。

次をお願いします。

文章は、なかなか読みづらいところがあるのですけれども、けっこう露骨に井伏さんへの恨みつらみのようなものが書かれています。こういう資料が少しずつ出てくることによって、今後二人の思いが解明されて行くのかなという気がします。最新の情報ということでお知らせしました。

次をお願いします。

これは、最後のコーナーに「杉並の作家」ということで、ご紹介しているところです。最初にご紹介するのは、横光利一さんです。杉並の作家と言ったときに何が杉並の作家かということが、ひとつ引っかけるところなのです。最初に

お話したところで、一時期、博物館がいっぱい出来たというお話をしたのですが、博物館がある程度出揃ったところで、今度は文学館が各地に出来るという状況がここ数年前からあるようです。そういう中で、地元とあまり関係がないのに無理やり地元と結びつけたり、あるいは新聞テレビで、いろいろ紹介されたので、皆さんご存知だと思のですが、例えば松本清張さんの記念館が九州に出来、お住まいになっていた杉並の書齋が、まるまる復元されているというようなところがあって、そういったものに対して研究者から批判が出ているということです。松本さんの場合ですと、名を成した後の杉並の状況を説明してもしょうがないのではないかと、九州に作るのであれば九州に居たときの苦労時代と言いますか、そういった部分を取り上げるべきではないのか、という議論もあつたりするのです。そういう形で、文学館の展示というものと、そこで扱われる作家との関係は、今、厳密にするべきではないかという議論が一つあります。

今回のレジュメと言いますか、お渡しした物の中には私どもが杉並の作家として取り上げた160人ほどのお名前を出しています。実は、この他にも杉並にいた方がいらっしゃいまして、これ以上増えることは確実なのですが、取り上げ方としては非常にラフと言いますか、少しの期間であっても杉並に住居を構えられた方は全部挙げています。その一つの例が、この横光利一、あるいはこの後ご紹介する川端康成です。このあたりについては、世田谷文学館でも横光利一さんは取り上げていますし、川端さんというと「鎌倉文士」として、鎌倉の方で取り上げられていますが、一時期しか杉並にいなかった方を、果たして杉並の作家として認めていいのだろうか、という議論はあると思います。それで、これからお話することを聞いて頂くと、我々の考え方を認めて頂けるのではないかと思ひ、ご紹介していきたいと思ひます。

次をお願いします。

横光さんは阿佐ヶ谷駅の北側にお住まいになっていました。新婚間もない奥さんを亡くされて落ち込んでいるときに、横光利一が突然結婚すると言い出したということと同居していた方が話しています。それで、横光さんは家を探したということですが、どうして阿佐ヶ谷方面になったのか、この辺はちょっと分からないのです。しかし、「二、三日阿佐ヶ谷方面を歩いて、家賃五十円で五間のかかなり大きな家を借りた。そして、先生の媒酌で現夫人の日向千代さんと結婚した。」と書かれています。「先生」というのは菊池寛のことで、菊池寛が川端康成、横光利一それぞれの才能を認めて二人を結びつけたと言われています。そのときに武野藤助という早稲田のロシア文学を中退した方で、ゴシップ記事などを書いていて知られていた方ですが、その方の紹介で竹野さんという方のお持ちになっていた阿佐ヶ谷の土地を借りるようになったということです。それは南傾斜地で200坪ばかりの土地に40坪くらいの家が建っている家です。

結婚式は昭和2年の4月5日です。そのときのことを、川端が「上京記」という作品の中で書いていますので、ちょっと読ませて頂きます。

「四月五日。七ヶ月振り伊豆湯ヶ島より上京。上野精養軒、横光の披露宴。...七日、金星堂東野君と阿佐ヶ谷に行き、横光も一緒に家を捜して貰ふ。その帰り横光と里道を行けば果しなし、雨に濡れる。道を間違へしなり。僕気の毒と思へど、横光は村道の雨の風情を愛す。...八日。今日も阿佐ヶ谷。横光、武野両君の家により、武野君に家を見に行つて貰ふ。その家に極める。...九日。文藝春秋社に預かつて貰つてみた荷物を送り、...ホテルを引き払ひ、東京駅に待ち、新居に行く。夕闇の門口に白き花卉点々。昏々と眠る。」と、こういうふう川端は書いていますのですけれども、川端康成は例の「伊豆の踊子」を書いて、伊豆のほうにずっとこもっているわけです。それが、東京に住むことになるのは、この横光利一の結婚式をきっかけに上京して来たからです。

次をお願いします。

これは、川端康成の手紙です。最後のここを見て頂くと「九日朝」と書かれています。「東京駅前 丸の内ホテル」とあります。これは、「少女世界」という編集部宛の手紙ですが、この中に「本日中に高円寺のほうへ、引っ越したいと思つて居ります。」とあります。そして先ほど読んでご紹介した「九日」のところは「文藝春秋社に預かつて貰つてみた荷物を送り、...ホテルを引き払ひ、東京駅に待ち、新居に行く。」とあるので、まさに、その日の朝の文章なのです。こういう珍しい手紙も見つかりましたのでご紹介したのですが、これで川端も高円寺に住むようになるわけです。しかし数ヶ月しか杉並にはおりませんでしたので、非常に短い期間だったのです。ですけれども横光と川端の関係を考えたときに、二人がこの辺りに住んだというのは重要な意味があるのではないかと思います。

ちょっと本題とはずれますけれども川端のことでご紹介しますと、「四つの机」という中で、川端康成は「私が高円寺に所帯を持つた初めは、机さへなくてビールの空箱の上で原稿を書いてみた。食器なども畳へ直かに並べてみた。インクも買へなくて壇の底に一分ほど残つたインクを、大和糊の蓋へあけてペンを寝させて潤しながら書き、私の文章の出てる雑誌が郵便で着くと、早速古雑誌屋へ二十銭で売つてタバコを一箱買う。」と書いています。このように高円寺に居るときは、非常に貧乏な生活をしているわけです。また、おもしろいのは川端康成の隣と言いますか、2軒長屋のような形で、くっついているのだと思いますけれども、その隣家に大宅壮一が、たまたま住んでいるのです。

大宅壮一が当時のことを書いています。「そのころ、私が川端君から受けた印象は、徹底したニヒリストだということである。それは経済面でのデタラメさに、よくあらわれていた。夫婦ぐらして、収入は私の何倍もあるはずなのに、いつでもスッカランで、外出するのに電車賃がなく、近所の酒屋や八百屋から五十銭借りて出て行つたものだ。」というようなことが書かれています。これとあわせて「放浪交友記」という中でも、こういう形で常に大宅壮一のところに、いろいろなものを借りに来たことが書いてあります。醤油なども借りに来たようです。川端が非常に痩せているというところを皮肉って、ある時、川端の奥さんに向かって「奥さん、たまにはね、ご主人がこわれたからと



って、借りに来るもんですよ。」という、こんな冗談も言ったというような話も出ているのですが、こういうように杉並に居るときには、貧乏な暮らしをされていたようなのです。今のは余談でしたので、先ほどの本題に戻します。

当時、横光は文学の神様という形で呼ばれていました。当時は「新感覚派」というものがあって、かなり感覚的な文章で表現していくのが流行ったのですが、その辺りから、もてはやされて、とにかく文学をやる人は横光の文章を勉強しなければいけないということを一時期、非常に言われたのです。ところが、ある時から、特に戦後になると急に読まれなくなって、最近また研究者等が見直し始めたようですけれども、以前神様と言われたような状況は今は全然ないのです。戦後、もてはやされなくなるそのような時期の一つの考え方として、「日本主義」のような考え方が、戦後の考え方の中で非常に嫌われたのかなという気がします。その辺と少しつながってくるところが、杉並と絡んでくるのではないかと思っていますので、それをご紹介します。

先ほどお話した家を貸した竹野さんがお書きになっている文章があるのでちょっと読ませて頂きます。「七月の或る日、家に住んで貰つてゐる挨拶を兼ねて、お邪魔にあがつた訳であった。庭には熱い日ざしの中に、草が茫々と伸びてゐた。それを眺めて横光君は、『庭は手入れなどしない方がいゝですよ。自然のまゝの姿に却って豊かな趣があります』といふ意味のことを言はれた。その後『春園』が発表されたが、その中の松下家の邸宅の描写に、『広い庭園の周囲に垣はあるが、どこからでも自由に這入れるやうな一見荒廃した感じの中に、いろいろな草花が一面に生えてゐた』『泰太郎は案内もなく庭の中に這入つてみた。枯れたまゝの芒が延び放題に延びた間から、枕丁花が薄紅色の花を覗かせてあたり、真白な雪柳の花が人目にも触れず咲き連つてあたりした。』という文句がある。そして、『庭の掃除を誰かがしようものなら、他の事には何一つ干渉したことはない林次郎も、これだけは声を上げて怒るといふ』その林次郎の、庭園は荒れるがまゝに捨てて置く趣味は、作者横光君の趣味の投影であることを思ひ出さずには居られなかつた。多分『春園』は阿佐ヶ谷あたりを背景として書かれたものであらう。」というようなことを書かれています。これ以外にも、武蔵野にある雑木林の景色について、いろいろ、ちりばめられているようなのです。

横光が杉並を引き払ってヨーロッパへ行き、その頃から横光利一の考え方が、東洋と西洋思想の対立となっていくわけです。今のを読んでみますと、ちょうど時期的にも杉並での生活がその後の横光の考え方に影響を与えている。あるいは、そういう考え方があったから、こういう武蔵野の風景を好んで阿佐ヶ谷の辺りに住んだということがあるのか、その辺はまだよく分かりません。けれども、一時期であっても、こういう形でその方の文学と言いますか、生き方と言いますか、そういったものに非常に影響を与えている部分があるのではないだろうかと思うのです。ですから、こういうふう考えると時期の長短と言いますか、それだけで杉並の作家であるとかないとか、というふうに切り捨ててしまうのは問題があるのではないかと思います。

次に、吉川英治さんのことなのですが、今、吉川英治の「新・平家物語」が出ております。吉川英治さんも、これと似たような、と言いますか最初あまり売れなくて、仕事をいろいろと経験されています。それで、関東大震災のときに、上野の山に震災後皆さん集まって来ますが、その状況の中で俺は作家というか、文章を書いて生きていくという意を決して山にこもられます。その後、文学者として一人歩きしていくわけなのですが、そのきっかけとなるのが杉並なのです。大正13年から杉並にお住まいになっているのですが、そのときは先ほどの横光と違いまして、高円寺に、三つしか部屋の無い家をお借りになります。これは、横光が家賃50円で家を借りたのとは全然違う額なのですけれども、7円という安さだったので高円寺に移って来たということです。

そこでちょうど「キング」という雑誌が出まして、その「キング」の創刊号に「剣難女難」という作品をお書きになるのです。「キング」という雑誌は創刊されたところでしたので、編集者としては当然そこで執筆者にはっぱをかけるところがあると思うのですけれども、そのときに編集をされていた広瀬照太郎さんという方が、「文学者としての意地を見せてくれ」というようなことを言われるわけです。それで吉川英治は、これまでペンネームで書いていたものを実名で書くということで書き出すわけです。吉川英治の「じ」というのは「治まる」という字なのですが、本名のほうは「次ぐ」という字なのです。これは印刷会社がたまたま誤植してしまって、それを吉川英治が気に入ったのでペンネームとして、これが定着していったということらしいのです。こういう形で書き出したのが杉並でのことなのです。

その後大正15年に「鳴門秘帖」の連載をするわけなのですが、その辺りから大衆作家として認められるようになり、「大衆文学全集」で印税が多額に入ってくるようになります。その中で、家庭内ではあまり幸福ではなくていろいろ波風が立ったようです。その辺で、「お金を持っていることは良くないことだ、即刻、消費すべきだ。」と新居を建てて杉並を出て、上落合のほうへ行くのです。

次をお願いします。

次は、林芙美子さんです。林芙美子さんも似たような感じで、昭和2年から杉並にお住まいでした。昭和4年の夏に、浴衣もなくて赤い海水着を着て日常、生活していたというのです。その海水着を着て生活しているところへ編集者が来られて、執筆依頼があったということです。非常に恥ずかしくて、膝を隠しながら話をしたということが書かれているようです。それで、お書きになったのが「九州炭坑街放浪記」という、いわゆる「放浪記」の原型になるものなのです。昭和5年に改造社からそれがまとめられて「放浪記」という形で出て一躍有名になって、こちらと同じようにお金が出来たので、杉並の外に家を建てるという形で出て行かれます。こういう下積み生活と言いますか、吉川さんも林さんも杉並で苦労されて、お金が出来て区外へ出て行くという似たようなパターンだと思います。

次をお願いします。

杉並の作家のところで、こういう年表みたいな形のものを作っています。今ご紹介した吉川英治さんが「キング」に連載された「鳴門秘帖」が売れて、花形になって出て行くという下積み生活の期間。横光利一さんが新居を構えて、区外へ出て行くという時期。これを見ると、吉川さんのほうが少し長くて、横光利一の場合こんなに短い。さらに川端康成はこんなに短い時期、1年までいっていません。このように短い期間しか居ない方でも、それなりに杉並との関わりはあるのではないかと思います。他に三好達治さんなども、切れ切れではありますけれども、杉並との関係で言えば出世作になったボードレールの『巴里の憂鬱』、また『測量船』なども、杉並にいたところに書かれました。

次をお願いします。

これは太宰さんです。太宰治の筆名を使い出したのも杉並に居るときです。太宰という名前がよく説明で出てくるのは大宰府から採っているのだ、というのですけれども、その意味がよく分からないのですが...。少なくとも吉川英治や太宰治というビッグネームが杉並から出てきているというようなことも、ひとつ挙げられると思います。

これは、保田与重郎です。「日本浪漫派」の中心人物です。この方は時期的には居住期間が長いのです。この方の場合も『日本の橋』や、「コギト」という雑誌の中で日本浪漫派の旗揚げをしているわけですから、その辺りの文章を書いていたのも多分高円寺だろうと思うのです。このような形でその方の主要著作なるものを書かれたのが杉並の地ということは幾つかあります。それから、場所的に、高円寺というのは、先ほどの「ピノチオ」もそうなのですが、同時に、「ピノチオ」には阿佐ヶ谷文士のような私小説作家がかなり来ていると同時に、左翼作家、小林多喜二というあたりも来ていたのです。プロレタリア文学が一時弾圧されるというところもあるわけですが、そういうプロレタリア的なものと日本浪漫派のようなものが、同じ高円寺から出て来るということや、日本文壇史の中で昭和10年代のころの大きな流れの中の一コマが、高円寺という中で形作られたというのは、非常に重要なことだろうと思います。この辺については、まだ私、全然分からないのですが今後また勉強していきたいと思っています。

こういった形で、杉並には一時期しか居住しなかったという短絡的な形で杉並の作家を否定するのではなくて、その方の、その地域での活動や杉並の風土がその人に与えた影響ですとか、そういった部分をもっと検証していかなければいけないのではないかと思います。今お話したようなことから「杉並の作家」という定義を、時間的な尺度で云々するのではなく、かなり幅広く捉えるべきだという杉並文学館の捉え方を、ご理解頂けるのではないかと思います。

今「杉並文学館」では杉並の作家を160人ご紹介しているわけですが、この方たちは皆、物故者ばかりなのです。何故、物故者だけ取り上げたかと言いますと、プライバシーの問題もあるのですが、一つ括れる部分があってこの様にご紹介しています。これ以降の、今、生きていらっしゃる方と

言いますか、若い方と言いますか、杉並で生まれて、その後もずっと杉並にお住まいで作品を発表されている方も沢山いらっしゃいます。けれども、その辺になってくると地域との関わりだとか、あるいは人との関わりなどの部分が、戦前の、いわゆる「文士」と言われる方や作家と、かなり生活態度と言いますか、その辺がちょっと違ってきているのかなと思っております。その辺をどのように捉えたらいいのかというのが、まだよく分からないのです。少なくとも戦前までの作家というのは、こういう捉え方が出来るのかなと考えております。

非常に雑駁（ざっぱく）なご説明で、スライドのほうも良く見えなくて分かりにくかったかと思えますけれども、これでご説明は終わらせて頂いて、また何かありましたらお話させて頂きたいと思えます。どうも、ありがとうございました。（拍手）